

## 『グレート・ギャツビー』論——謎と2重性

薬学部第2英語 大野 真

### 1. ギャツビーの「謎」と2重性

筆者は『グレート・ギャツビー』を何度か授業で扱い、学生と主に読んだ経験を持つ。その際には全9章のこの小説を大体において毎回1章ずつ読み進めていったが、とくに最初の2~3章を読んでいる頃の学生の感想として、中心人物のジェイ・ギャツビーの正体や行動が謎に満ちていて、この先どのようにその謎が解明されていくのか物語の展開が楽しみである、というコメントがしばしば見受けられた。つまり、学生たちはこの小説を一種のミステリー小説のように読んでいたのだ。

確かに『グレート・ギャツビー』の最初の数章は、読者に対する謎かけに満ちている。例えば、第1章の冒頭で、語り手のニック・キャラウェイがこれから物語る話の前置きとして、中心人物であるギャツビーの人生についての自分の見解を読者に対して述べるのだが、ギャツビーの性格である「希望に対する並はずれた天分」(2)や彼の追求した「夢 his dreams」(2)について暗示的に言及しているものの、その夢の具体的な内容についてははっきりと分からず、謎めいている。

前置きが終わって、物語が始まってからも、中心人物であるべきギャツビーはなかなか姿を現さない。第1章は語り手ニックが中西部から東部にやってきて証券の仕事に就き、親戚であるデージー・ブキャナンやその夫である金持ちのトム・ブキャナンと再会する話である。ギャツビーが姿を現すのは、ようやく第1章の最後の場面で、月夜の下、屋敷の外に出てきたギャツビーが対岸の栈橋の端に灯る「1つの緑の光 a single green light」(23)に向かって奇妙な具合に両手を差し伸べる不思議な行為をするのを、隣人であるニックが偶然目撃するところである。しかし、この第1章の最後の場面では、ニックはギャツビーの姿を目撃するだけで、二人は実際に会話を交わさない。

第2章は、ニックがトムと一緒にトムの愛人であるマートル・ウィルソンに会いに行き、その後酒盛りをする話についやされる。実際にニックがギャツビーに会って話を交わすのは、第3章でギャツビー宅でのパーティに招かれた時が初めてである(51)。その時点でも、はたして何故ギャツビーが毎夜のごとく盛大なパーティを開くのか、その動機が謎であるし、招かれたニックもなかなか主人のギャツビーに会えず、たまたま話をしていた男が実はギャツビーであったと途中で気づくなどの構成の工夫がされていて、読者をじらさせる。

このように、この物語の謎の中心にはギャツビーが存在するのであるが、謎の核心であるギャツビー自体に向かってはなかなか直線的に物語が進まず、その周囲を「円」のようにぐるぐると回りつつ徐々に中心に迫っていくような構造を持っているのだ。なお、第1章の最後でギャツビーが対岸の緑の光を見つめる場面は今後の展開(つまり対岸に住む元恋人のデージーに対するギャツビーの愛の物語)の伏線となっており、このように随所に伏線を置くことも謎の効果を強めている。

ギャツビーについての謎を深めるのは、彼についての噂である。例えば、第2章において、ニックはトムの愛人マートルの妹キャサリンから、未知の隣人であるギャツビーについての噂話を聞く。「ええ、あの人はウィルヘルム皇帝の甥かいとこだという噂よ。そこから全部のお金が出ているのよ」(34)。ウィルヘルム皇帝は第1次世界大戦中のドイツ皇帝であり、ドイツはアメリカ合衆国に

としては敵国であった。つまり、ギャツビーは敵国の皇帝と結びついた人間と噂されていたのだ。

その他にも、ギャツビー宅のパーティに来た者たちは、謎の主人であるギャツビーに対して様々な噂をする。例えば、彼は昔に人を殺したことがあるとか、戦争中にドイツのスパイであったとかいう具合だ(46)。あるいは、「あの男は酒の密売人 (bootlegger) だ」(64) という噂もある。

こうした噂が生じるのは、ギャツビーがその金の出所も含めて過去の素性が知れない存在だからだ。ギャツビーという正体不明の人間はアイデンティティーの謎を抱えた存在であり、アイデンティティーの謎こそが最も噂話をかき立てるのだ。なお、これらの噂話が、戦争や殺人といった暴力、あるいは酒の密売といった社会の暗黒面に絡んでいることがとりわけ注目される。

このようにギャツビーはパーティに来た多くの人々にとって正体不明の怪しげな存在であるが、語り手のニックはギャツビーが謎めいてはいるものの、同時に、魅力的な人間であることも洞察している。第3章でニックが初めてギャツビーと対面したときに、その魅力のある笑顔 (smiles) について以下のように描いている。「それは、その内に永遠の安堵 (eternal reassurance) という性質を持つ類まれな笑顔の一つであり、一生の中で四〜五回しかお目にかかれないような笑顔であった」(51)。「オックスフォードで教育を受けた」(68) と称するギャツビーは、セリフの末尾に「きみ old sport」(50 他) という言葉を付け加えることを口癖にしており、どことなく品のある人物だ。つまり、ギャツビーという存在は闇の部分と共に魅力や気品を持つ 2 重性を特徴としており、そうした 2 重性が謎を生むのだ。

さて、物語の後半においても、こうした 2 重性は解消されずにむしろいっそう強まっていく。例えば、4 章でギャツビーとデイジーが元恋人であったことが物語られて、ギャツビーが現在の邸宅を買ったのはデイジーが湾の対岸にいるからであることが分かり(83)、5 章ではギャツビーが見つめていた緑の光がデイジーのいる側の栈橋の端に一晩中灯っているものであったことも分かり(99)、ギャツビーの行動の動機が明らかになって、謎の一部は解明されたように見える。しかし、ギャツビーのデイジーに対する純粋な思いが強調して描かれるのと同時に、ギャツビーの闇の側面、つまり実在のギャングをモデルとした暗黒街の大物であるユダヤ人ウルフシャイムとの怪しげな商売もまた描かれていく。そして、最終的には、第7章でトムの手によって、デイジーのいる前で、ギャツビーがウルフシャイムと行っていた犯罪的な闇の商売が暴露され(141-42)、破局に至るのである。ギャツビーのもつ純愛と闇の世界との 2 重性の矛盾が破局を生むのだ。

ギャツビーの抱える 2 重性を時間の側面から見ると、過去と現在との 2 重性となる。ギャツビーは過去におけるデイジーとの恋を現在に復元しようと試み、「過去を繰り返すことはできないよ」と忠告するニックに対して、「もちろん繰り返せるさ!」と叫ぶ(117)。けれども、過去を繰り返すことは、時間の流れに逆らう本来不可能な試みであり、過去と現在、夢と現実との矛盾をはらんだ 2 重性は強まるばかりである。

しかし、ギャツビーにとっては 2 重性の矛盾こそが力の源泉となっていたとも考えられる。第5章で、ギャツビーがデイジーと 5 年ぶりに念願の再会を果たし、自分の邸宅にデイジーを案内して、窓から一緒に緑の灯を眺めた時にも、「その光の巨大な意義 (the colossal significance of that light) は今や永久に失われてしまったという考えが、ひよっとしたら彼に浮かんだのかもしれない」(99) と述べられている。理想の対象が現実のものとなると、逆に夢としての力は弱まってしまうのだ。

第5章の末尾では以下のように書かれている。「その午後でさえも、デイジーが彼の夢の水準には達しなかった瞬間があったに違いなかった—それは彼女自身のせいではなくて、彼の幻想の巨大な生命力 (the colossal vitality of his illusion) のためなのであった」(102)。

この引用で注目すべきは、生命力の強さと幻想とが等しいものとされていることだ。幻想とは、夢と現実、あるいは過去と現在との隔たりのことであり、矛盾をはらんだ2重性に他ならない。ギャツビーという存在のはらむ2重性は、謎を生むとともに、その巨大な力の源泉でもある。この小説のタイトルで『グレート・ギャツビー (The Great Gatsby)』という具合にギャツビーに対して“great”という形容がされているのも、その強烈な2重性があるためなのだ。

## 2. 2重性とミステリー小説—1人2役、変名と分身

本論の第1章では、ギャツビーにまつわる謎が、彼という存在の2重性から生じていることを論じた。この第2章では、2重性とミステリー小説との関わりについて、さらに考察してみたい。

ミステリー小説(「探偵小説」あるいは「推理小説」)の特徴としては、表層と深層という2層的構造を持つことが挙げられると思う<sup>1</sup>。表層に表れている事件の深層には、その事件の隠された真相が存在する。ただし、犯人は事件の真相を見破られないように様々な偽装や歪曲を施してあるので、そこに謎が生じるのである。一方、探偵の側は表層に残されたわずかな手がかりを頼りとして、推理力を働かせて謎の真相に迫ろうとする。表層から深層の真相へと進んでいく探偵側の推理力と、真相を見破られまいとする犯人側の偽装や歪曲との間のせめぎあいが、ミステリー小説の醍醐味だ。

こうしたミステリー小説における表層と深層の2層的構造は、フロイトが指摘した夢の2層的構造と類比的である。フロイトによると、夢は表層の顕在的内容と深層の潜在的内容という2層的構造を持つ。我々が一般的に「夢」として見ている顕在的内容を分析し解釈していくと、その深層に秘められた潜在的内容—夢の「意味」—にたどりつく。しかし、表層の顕在的内容には様々な偽装や歪曲が施されているので、解釈の仕事は容易ではない。精神分析家の解釈の仕事と、それに抵抗する歪曲の作業との間の関係は、探偵と犯人との間の関係と似ている。

フロイトは夢における偽装や歪曲の例として様々なものを挙げているが、特に注目されるのが、夢の深層において実は複数の人間を意味するものが、表層では1人の人間に「圧縮」されていたり、またはその逆に、深層において1人の人間であるものが表層では複数の人間に「分割」されていたりすることだ。つまり、深層と表層との関係は、1対1ではなく、1対多あるいは多対1なのだ。

このことは、ミステリー小説の重要なトリックである「1人2役」を想起させる。1人2役は、夢における深層と表層の1対多関係に対応するのである。(なお、1人2役のトリックのヴァリエーションとしての「2人1役」は、深層と表層との多対1関係に対応している。) 1人2役の例としては、1人の人間が被害者かつ犯人を演じたり(「被害者即犯人」)、1人の人間が探偵かつ犯人を演じたりするものがある(「探偵即犯人」)。

さて、1人2役という観点から、あらためて『グレート・ギャツビー』を考察してみたい。

ただちに気づくことは、ギャツビーという存在自体が1人2役の産物ということだ。ギャツビーは本名をジェームズ・ギャッツ (James Gatz) という。17歳の時に、鉱山成金のダン・コーディーのヨットを目にして、それ以後ジェイ・ギャツビー (Jay Gatsby) と名乗るようになったのだ。

このように法的な名前とは別の新しい名前を名乗るようになった動機は、ニックの視点から、第 6 章で次のように描かれている。

その時点で、すでに彼は長い間その[新しい]名前を準備していたと僕は思う。彼の両親は不甲斐なく、成功とは縁のない農民であった—彼の想像力は彼らを自分の両親とは実際に決して認めていなかった。本当のところ、ロング・アイランドのウエスト・エッグに住むジェイ・ギャツビーは、彼の自分自身に対するプラトンの理想主義的観念 (his Platonic conception of himself) から生じたのであった。彼は神の子 (a son of God) であった—この言い回しは、何かを意味するとしたら、まさにその通りのことを意味する—そして、彼は父なる神の御業にたずさわらず、巨大で俗悪なけばけばしい美に仕えねばならなかった。そうして彼は 17 歳の少年が創り上げたがるような類のジェイ・ギャツビーという存在を創り上げ、この観念に対して最後まで忠実だったのだ。(104)

つまり、「ジェイ・ギャツビー」という存在は、17 歳の想像力豊かな少年が、不甲斐ない現実から逃れるための理想をこめて創り上げた人工的な存在なのだ。貧しい少年にとって、鉱山成金のコーディーの豪華なヨットは「この世の美と魅惑の全て」を表わすものであり (106)、それが「ジェイ・ギャツビー」という新しい名前を名乗るきっかけとなったのだ。そしてその後コーディーのヨットで共に旅をして過ごすことにより、いわばコーディーのフロンティア精神も引き継ぎ、「ジェイ・ギャツビーという存在のあいまいな輪郭は中身を満たされていき、1 人の男としての実質を持つ」ようになっていったのだ (107)。さらに、彼にとって理想の女性と思えたデイジーとの恋に陥るのも、ジェイ・ギャツビーとなってから後のことである。しかし、ダン・コーディーとの出会いをきっかけに創られていった「ジェイ・ギャツビー」という人工的な存在は、第 7 章でトムがギャツビーとウルフシャイムとの闇の商売を敵意をこめてデイジーの前で暴き出したことにより、「ガラスのように砕けて」しまうのだ (157)。

この小説は、いわば、1 人の男がその生涯において、本名の「ジェームズ・ギャッツ」と自らの理想を託して創り上げた「ジェイ・ギャツビー」という架空の存在の 1 人 2 役を演じた物語と言えるのだが、その 1 人 2 役が「名前を変える」という行為をきっかけとしていることが特徴だ。

さて、以上述べたジェームズ・ギャッツからジェイ・ギャツビーへという 1 人 2 役以外に、この小説にはさらに別のレベルでの 1 人 2 役が存在する。それは、主人公のギャツビーと物語の語り手であるニックとの関係である。

『グレート・ギャツビー』は 20 世紀アメリカ小説屈指の傑作として既に古典としての地位を得ているが、この小説の成功の大きな要因として、ニックという語り手を導入したことが挙げられる。

第 1 章の冒頭で、語り手であるニックの読者に対する自己紹介がなされているが、まず、ニックが父親からの人生訓を守って、他人に対する安易な批判的判断を慎むように心掛けてきたことが述べられている (1)。こうしたニックの中立的な性格は、様々な事件を見聞きして公平に物語る上で望ましい性質である。また、同じ冒頭の個所で、ニックがこれから語る物語の中心人物であるギャツビーに対して、「ありのままの軽蔑 unaffected scorn」を感じる部分があると共に、「彼の夢 his

dreams」への理解という、好悪両面の感情を持っていることが示唆される(2-3)。

ニックがギャツビーに対して抱いていた好悪両面の感情は、物語が結末に近づいてギャツビーが死を迎える頃に、深い共感へと変化する。第8章でギャツビーがニックに対して自分の過去を告白し、デイジーへの深い思いを語った後に、別れ際にニックはギャツビーに対して次のように叫ぶ。「あいつらは腐った連中だ。君はあの連中全部を寄せ集めたよりも価値があるよ」(164)。その後ギャツビーは、妻を車でひき逃げした犯人がギャツビーであると思い込んだジョージ・ウィルソンによって殺されてしまうのだが、最終章の第9章で、ニックは死後のギャツビーのいわば唯一の友人としてふるまう。「僕は自分がギャツビーの味方であること、しかも唯一の味方であると気づいた」(174)。そして、パーティに押しかけていた客たちやトムはもちろんのこと、元恋人のデイジーや仕事仲間のウルフシャイムでさえも葬式に来ようとしない中で、なんとか参列者(つまりギャツビーに対する他の共感者)を見つけようと努力奔走するのだ。その際に、死後のギャツビーに対してニックは「君のために誰かを見つけてあげるよ、ギャツビー。心配しないで」と語りかけ(174-75)、その一方で、死んだギャツビーの方もニックの心の中に「僕のために誰かを見つけてほしい」と訴えかけるかのごとくである(175)。このように生者であるニックと死者であるギャツビーとが、生死の境を越えて深く結びつくのだ。

その後にギャツビーの死を知った父親ヘンリー・C・ギャッツ氏が来るが、ニックはその父親に対して、息子であるギャツビーとの関係を次のようにまとめる。「僕たちは親友でした We were close friends」(178)。そして、ギャッツ氏の方も、息子が少年時代に書いていた自己改善のためのスケジュール表を見せたりして(184)、ギャツビーの少年時代のエピソードを物語るのだ。

こうした最終章におけるニックのギャツビーに対する深い共感、ギャツビーにおける過去(ダン・コーディーとの出会いによる変名という1人2役も含めて)を知り、ギャツビーにおけるデイジーへの純粋な思いとウルフシャイムとの闇の商売の両面を知った上で生じてきたことが特徴である。つまり、ギャツビーという存在の2重性を踏まえた上での共感なのだ。

ここで、ニックにとって、ギャツビーという存在は自らの「分身」としての意味を持つと言えるのではないだろうか。ニックのギャツビーに対する深い共感、ギャツビーの生涯を特徴づける光と影の2重性を自らの内部にも存在するものとして受けとめたことから生まれている。最終章の末尾において、ギャツビーの夢は西部人のフロンティア精神と関連付けられ(187)、かつてオランダ人の水夫が新大陸に対して抱いた夢とも結び付けられるのだが(192)、このようにギャツビー個人の夢がその意義を拡大されていくことが可能になるのも、ギャツビーの2重性を語り手であるニックが自らの内部で深く受けとめ共感することによって、広く読者へと伝わっていくからだ。

さらに、ニックとギャツビーは共に作者フィッツジェラルドの1人2役的な分身であり、ギャツビーという存在の光と影の2重性(それは作者も抱えていたものだ)を、その夢と破滅/死を含めて物語り、見つめ直すために、視点的人物ニックは創造されたのだ。ニックは自らの分身であるギャツビーの2重性と1人2役の生涯を、「物語る」というメタレベルから検討し共感するのだ。

### 3. 『グレート・ギャツビー』と『ロング・グッドバイ』

さて、前章までで論じた『グレート・ギャツビー』における2重性—ミステリー小説的な1人2

役や分身の主題を、別の角度から検討してみたい。

『グレート・ギャツビー』を高く評価して深い影響を受けた日本の小説家として村上春樹がいる。村上は自らこの小説を翻訳し、その「訳者あとがき」(2006年)において、以下のように述べている。「もし『これまでの人生で巡り会った最も重要な本を三冊あげろ』と言われたら、考えるまでもなく答えは決まっている。この『グレート・ギャツビー』と、ドストエフスキー『カラマゾフの兄弟』と、レイモンド・チャンドラー『ロング・グッドバイ』である。どれも僕の人生(読書家としての人生、作家としての人生)にとっては不可欠な小説だが、どうしても一冊だけにしろと言われたら、僕はやはり迷うことなく『グレート・ギャツビー』を選ぶ」(333)。

しかし、これほどまでに村上が高く評価する作品でありながら、『グレート・ギャツビー』の卓越性に対して疑問を持つ読者も少なからずいることを認めているのも興味深い(334)。

そうした疑問に対して村上は、『グレート・ギャツビー』の繊細で鮮やかな描写(335)や「その自由自在、融通無碍な美しい文体」(335)や素晴らしい文章のリズム(339)や妻ゼルダとの関わりという伝記的事実などを挙げて懸命にその魅力を説明しようとしているのだが、同書の「訳者あとがき」の中では、この作品が傑出している理由を十分に探り当ててはいないようである。

『グレート・ギャツビー』が卓越している理由は、村上が深い影響を受けたもう一つの小説、レイモンド・チャンドラーの『ロング・グッドバイ』を参照することで見えてくるように思う。

『ロング・グッドバイ』は、私立探偵フィリップ・マーロウがあるとき酔っ払いだが不思議な魅力のあるテリー・レノックスという男と出会い、しばしの間交流を重ねるが、それをきっかけとして複数の殺人事件の謎に巻き込まれていく物語である。そして物語の結尾は、マーロウとテリーとの痛切な別れで終わる。

村上は『グレート・ギャツビー』の翻訳の後に、『ロング・グッドバイ』の翻訳も刊行し(2007年)、その「訳者あとがき」において、『ロング・グッドバイ』と『グレート・ギャツビー』を比較して、両者の共通点を探っている。村上は『ロング・グッドバイ』の語り手であるマーロウを『グレート・ギャツビー』の語り手ニックに比し、また、マーロウが交友するテリーをギャツビーになぞらえて、両作品を類比的に捉える。とくに、村上がテリーやギャツビーをそれぞれ語り手マーロウやニックの「分身」として解釈していることが注目される(553)。

さて、村上の見解を踏まえた上で、『ロング・グッドバイ』を2重性や1人2役の観点から再検討してみたい。(なお、これからは『ロング・グッドバイ』のトリックや結末にも言及する。)

まず、ミステリー小説として『ロング・グッドバイ』を考えた場合には、中心的なトリックとして1人2役が用いられていることが特徴だ。テリーは過去においてポール・マーストンという名前を名乗っていたことがあり、現在は作家ロジャー・ウェイドの妻となっているアイリーンと恋人関係だったのも、ポール・マーストンとしての過去のテリーである。さらに、テリーは物語の結末において、シスコ・マイオラノスというメキシコ人のような外見の男としてマーロウの前に再登場する。自殺したと思われていたテリーは実は生きていたのだが、整形手術を受けて別人に変わっていた。そして、別の存在へと変わったテリーに対してマーロウは決別するのだ。

このように、「ポール・マーストン=テリー・レノックス=シスコ・マイオラノス」という1人3役(1人2役の発展形)のトリックが、この小説全体を支えている。1人2役はアイデンティティ

一の揺らぎや多重人格性と結びつくのであり、或る人間が別の人間に化けたり、あるいは1人の人間の中に別の人格が隠れている可能性がチャンドラーの人間観の根本にあったようだ。

村上はテリーがマーロウの分身であると指摘したが、それは具体的には、フィリップ・マーロウのイニシャルがポール・マーストン（テリーの過去の名前）のイニシャルと同じであるという事実としてテキスト中に表れる。そして、その事実をマーロウに告白するのはテリーの元恋人のアイリーンである（333）。アイリーンは過去のテリーであるポール・マーストンとの恋を、「人生で一度しかないような、激しくて、神秘的で、ありそうもないような類の恋愛」と称して理想化しているが（333）、マーロウは過去のテリーの理想化された姿と通じるのであり、逆に現在の墮落した酔っ払いのテリーはアイリーンにとって死んだも同然、消えたも同然、と見なされているのだ。

さて、このようにテリーが1人3役を演じることが可能になるのも、テリーという存在が2重性を抱えた人物として描かれているからだ。マーロウと知り合った時のテリーは取っ払いであるが礼儀正しく（200）、酔っぱらうと恭しい英国訛りとなり（200）、青年でありながら白髪で（199）、顔の右側に傷跡がある（201）。また、ギムレットの作り方にも蘊蓄がある。「白髪と傷のある顔とほのかな魅力と独特の種類のパライド」（250）を持つ謎の人物テリー。テリーの顔の傷跡や白髪は第2次世界大戦中の勇敢な負傷とその後の悲惨な捕虜体験によるものだが、それをきっかけにして彼は神経を病み、酒浸りとなり、また、闇の商売に生きる連中との付き合いもできた（254）。つまり、テリーは魅力的であると同時に墮落した存在でもあるという正と負の2重性をもつ。正と負の謎めいた2重性という点で、テリーは『グレート・ギャツビー』のギャツビーと共通している。

重要なのは、こうした魅力と墮落、正と負の2重性を最も感じとっているのが語り手のマーロウであるということだ。物語の結尾の場面で、マーロウはテリーに言う。「君のやり方は好ましいし、君の性質も好ましい、けれどもどこかが歪んでいるんだ（but there was something wrong）。…君は良い気性の良い奴だ。けれども、君は正直な人たちと付き合うのとまったく同じように、チンピラややくざとも楽しく付き合えるんだ」（477）。

『ロング・グッドバイ』という小説は、『グレート・ギャツビー』と同じく、語り手が自分の分身である対象の持つ謎めいた2重性と向き合う物語であると言えるだろう。

#### 4. 失われたもの—時間の暴力性

村上春樹の指摘した『グレート・ギャツビー』と『ロング・グッドバイ』の共通点を踏まえ、さらには村上自身の作品も含めて論を展開させたものとしては、内田樹の『街場の文体論』（2012年）がある。内田は、村上の長編小説『羊をめぐる冒険』（1982年）において、語り手「僕」の親友「鼠」が語り手の「分身（アルター・エゴ）」であることを確認した上で（46）、『羊』を『グレート・ギャツビー』（1925年）および『ロング・グッドバイ』（1953年）と比較し、時代の異なるこれらの3作品が共に、分身との別れの物語であることを指摘する（47）。分身は語り手の中の幼く野性的な「少年期」を表わし、分身との別れは「少年期との決別」に他ならないと内田は主張する（49）。

ここで、筆者は内田の言う「分身（少年期）との決別」という主題を時間という側面から再考してみたい。少年期との決別は、時間の流れの中で必然的に迎えざるを得ないものだからだ。

まず、『グレート・ギャツビー』と『ロング・グッドバイ』における1人2役あるいは1人3役

は、時間軸に沿って展開されていることが特徴だ。例えば、『グレート・ギャツビー』では、ジェームズ・ギャッツが17歳の時に変名してジェイ・ギャツビーになる。また、『ロング・グッドバイ』におけるテリー・レノックスも、過去においてはポール・マーストンという名前を用いており、物語の結尾においてはシスコ・マイオラノスというメキシコ人のような男となって再登場する。

『ロング・グッドバイ』におけるアイリーン・ウェイドは、テリーの元恋人だが、彼女が愛したのは理想化された過去のテリー（ポール・マーストンとしてのテリー）であり、身を持ち崩した現在のテリーを認めない（425）。彼女はいわば過去から現在への時間の流れに逆らおうとするのであり、彼女の犯す殺人の動機は、過去のテリーの姿を理想化しすぎていたこともその一因だ。アイリーンは「夢のような女 the dream」（264）と形容されるような美女であるが、アイリーンの夢のような美しさとは、理想化された過去と現在の現実との間の隔たりを示すものであると言えよう。

しかし、時間の流れは不可逆的なものであり、過去に執着するアイリーンは滅びざるを得ない。自殺したアイリーンは遺書の中で次のように書く。「時間は全てを卑しく、みすぼらしく、歪んだものにしてしまいます Time makes everything mean and shabby and wrinkled」（442）。ここに表れているのは、時間の不可逆な流れのもたらす暴力性である。『グレート・ギャツビー』や『ロング・グッドバイ』は、各々、第1次と第2次の未曾有の世界大戦を経た後の世界を描いている。戦争は巨大な暴力だが、時間は戦争にも比すべき暴力性を持ち、過去の秩序を解体していくのである<sup>2</sup>。

『グレート・ギャツビー』におけるギャツビーもまた、過去を取り戻そうとする不可能な夢に挑んで敗れ、破滅して死を迎えた。時間の不可逆な流れに抗することは不可能なのであるが、夢に生きたギャツビーの死に至るまでの生涯を、分身である語り手ニックの視点を通じて共感を持って描くことにより、作者は時間の中で生きていく人間の姿に挽歌を捧げたと言えるだろう。

### 【注】

1. 拙論「ミステリーの中でのフォークナー」参照。
2. なお、ハードボイルド小説の誕生は、第1次世界大戦による秩序解体と深い関わりを持つ。

### 【引用文献】

Chandler, Raymond. *The Long Good-bye*. 1953. *The Chandler Collection: Volume 2*. London: Pan Books, 1983.

Fitzgerald, F. Scott. *The Great Gatsby*. 1926. New York: Penguin Books, 2011.

内田樹『街場の文体論』ミシマ社、2012年。

大野真「ミステリーの中でのフォークナー」『フォークナー』13（2011）：69-83。

村上春樹「翻訳者として、小説家として—訳者あとがき」、スコット・フィッツジェラルド著、村上春樹訳『グレート・ギャツビー』中央公論新社、2006年。

村上春樹「訳者あとがき—純古典小説としての『ロング・グッドバイ』」、レイモンド・チャンドラー著、村上春樹訳『ロング・グッドバイ』早川書房、2007年。